日本労働年鑑　1951年版（第23集）
The Labour Year Book of Japan 1951

第一部　労働者状態

第四編　賃金と労働条件

第三章　労働災害

第二節　炭鉱の労働災害

鉱山産業における坑内作業はその自然的諸条件、作業環境の故に、他産業に比べて遥に多くの危険を有しあるいは坑内に特有ないわゆる職業病があること、そのために災害率が他産業に比べて著しく高いことはさきにもみた通りである。殊に敗戦後の現状は、戦時中における固定設備の荒廃のままで生産が続行されたために、炭鉱災害は年とともに頻発化し、出炭高の回復程度にも増して災害の発生は甚しく、一九四八年六月と九月に相次いで起つだ三菱勝田および同美唄炭鉱の瓦斯爆発、沖の山炭鉱の水没事件は炭鉱保安に対する労働者の異常な関心をよび起した。

第93表によつて一九三二年以後の炭鉱災害状況をみると、まず災害件数では四五年度には四八、七二三件で一九三二年以後の最低数を示したが、その後四六年六一、三六〇、四七年九二、六九三、四八年一四三、七六九と急激な上昇傾向に転じ、四七年においてすでに三二年以降の最高記録を示すにいたつている。

羅災者数　罹災者数は一九三二年の五九、一九七人から次第に増加して、四四年度には一〇〇、六九四人の多数に達した。しかるに四五年度には終戦に伴う労務者数の激減によつて約半数の五〇、〇五九人となつた。その後人員の増加とともに罹災者数も増加し、四七年度九三、八九五人、四八年度には実に一四五、二七〇人を記録し、前年度に比べて五四・七％の増加で、三二年以降の最高を示している。これを一年千人当りおよび百万瓲当りについてみると、前者においては二七二人（対前年度比三〇・七％増）後者においては四、一七五人（同三〇・四％増）と、いずれも前年度より三割程度の増加となつている。かくのごとく四八年度においては発生件数においても罹災者数においても一九三二年以後の最高を示しているが、これを死亡、負傷別にみると、四七年度においては四六年度に比し負傷者は増加した一方、死亡者は逆に減少を示していたにも拘らず、四八年度においては両者とも前年度のそれを上廻つている（負傷者五四・七％増、死亡者五・九％増）。しかし、これを一年千人当りおよび百万瓲当りについてみると、負傷者においては二七〇人（対前年度比三一・一％増）、四、一五〇（同三〇・八％増）と前年度よりいずれも三割当の増加を示しているが、一方死亡者は一・六人（前年度一・八人）、二五人（同二八人）と逆に前年度より幾分減少している。なお、そのうち負傷者の八七・七％、死亡省の八八・一％は坑内災害によるものである。さらに負傷程度を坑内外別にみると、休業二週間以上の重傷と見做されるものは坑内夫八六・五％、坑外夫一三・五％、休業三日以上の軽傷は坑内夫八八・二％、坑外夫一一・八％と重軽傷いずれも坑内夫が圧倒的に多い（第94表）。

一九四四年一二月以降における炭鉱の重要災害発生状況は次の通りである。
炭鉱の重要災害発生状況

,

炭鉱名	所在地	原因	年月日	死亡	傷病	計
三池	福岡	落盤	19.12. 4	3	3	6
新屋敷	佐賀	ガス爆発	21. 1.11	2	17	19
豆川	〃	〃	1.15	11	—	11
浅野雨滝	北海道	〃	1.29	3	16	19
常盤崎坑	福島	ガス炭鉱爆発	3. 6	11	18	29
仁賀	岡山	ガス爆発	4.18	4	—	4
万字	北海道	〃	5. 2	3	3	6
小野田	山口	落盤	7. 9	10	—	10

三井田川	福岡	ガス爆発	6.19	13	35	48
大峰	〃	感電	8. 9	1	―	1
新入	〃	炭車逸走	10.18	7	6	13
小倉	〃	落盤	11. 2	3	2	5
新屋敷	佐賀	ガス爆発	12.30	―	8	8
三井砂川	北海道	坑内火災	22. 2.19	11	―	11
三井田川	福岡	ガス爆発	1.20	4	6	10
嘉穂	〃	火薬爆発	5.27	2	4	6
奔別	北海道	火災	5.16	1	―	1
幾春別	〃	〃	5.16	―	―	―
砂川	〃	ガス爆発	5.14	3	―	3
豊国	福岡	〃	6.25	1	5	6
田川	〃	崩落炭車逸走	6.30	1	―	1
空知	北海道	ガス爆発	7.20	1	3	4
浅野雨滝	〃	落盤	7. 4	5	―	5
昭和	〃	ガス爆発	8. 6	―	1	1
芦別油谷	〃	水害	8.15	1	―	1
夕張	〃	ゲーヂ故障	8.21	―	22	22
三池	福岡	落盤	8.21	2	6	8
高松	〃	ガス爆発	9. 8	8	29	37
仁賀	岡山	〃	8.14	―	4	4
常盤	福島	〃	10.20	12	11	23
稚内	北海道	〃	10.25	15	―	15
崎戸	長崎	落盤	11. 8	5	―	5
好間	福島	出水	12.22	5	2	7
大之浦	福岡	ガス爆発	12.22	―	13	13
二瀬	〃	火薬爆発	23. 1.26	4	11	15
東幌内	北海道	ガス爆発	4.28	3	2	5
常盤	福島	ダム決壊	6. 5	―	13	13
大川	〃	火薬爆発	6. 8	2	8	10
勝田	福岡	ガス爆発	6.18	62	8	70
三井田川	〃	落盤	6.15	4	3	7
三池	〃	〃	6.26	4	3	7
三菱美唄	北海道	ガス爆発	6.29	13	10	23
勝田	福岡	落盤	6.27	1	2	3

災害原因　次に四八年度炭鉱災害を原因別にみると、第95表のごとく年間総件数一四三、七六九件のうち最も多いのは「落盤又は側壁の崩壊」(四三、九五〇件)で、総件数の三〇・六%、次いで「鉱車関係」(坑内における鉱車の逸走又は脱線を含む)が同じく一五・二%で、この両者で総件数の四五・八%とほぼ半数を占め、災害が主として落盤鉱車関係に起因するものであることが知られよう。これを罹災者数についてみても「落盤又は側壁崩壊」によるものが、総罹災者数一四五、二七〇人(職員および係員を含む)の三〇・六%にあたる四四、四〇一人、次いで「鉱車関係」が二一、九七九人で一五・一%を占め両者で四五・七%に達している

また、一件当りの罹災者数は第96表のごとく、瓦斯爆発のみは依然多く、六・七人となつて、他の原因に比

べて瓦斯爆発の被害程度が一段と大きいのが注目される。

日本労働年鑑　第23集／1951年版
発行　1951年1月1日
編著　法政大学大原社会問題研究所
発行所　時事通信社
2000年2月15日公開開始